

神と古代史との一考察

一 はじめに

お彼岸やお盆、命日等、日本人は墓参を行う習俗があります。私もその習俗に併せる一人ではありますが、先日墓参をした際、ふと思ったのです。「古代人は古墳に埋葬した後どうしていたのだろう・・・と。魏志倭人伝に見られるように一週間喪に服すところまでは勿論そうだったのでしょうが、問題はその後です。現在普通の多くのお墓は江戸時代の寺請制度の影響により仏教的な習俗に基づく墓参をしておりますが、仏教伝来は通説通りとして538年・552年とされており現在との関連性は考えられません。一方神道でもその整合性が見えるのは律令前と考えられる（後述）ため該当はしないことでしょう。

しかしながら、信仰・霊性等については地域差こそあろうが、縄文時代にはその片鱗が見られることから、埋葬の際のもがり以降に何も儀式的なものが行われていなかったとは考えられそうにもない。しかしながら、古墳に触れられているサイト・書籍等を眺めるかがり、直接遺物からそのような痕跡が発見されているというわけでもないようであります。それでは全く埋葬以降儀式的な事は行われなかったのであろうか・・・？

本論は上記を焦点とし、古代史においてあまり意識されてきてはいなかったであろう事象に少ない資料を基に考察を進め最終的には神社という信仰対象から古代史を眺め、さらに以前の弥生時代後期邪馬台国の原文との対比を試みるものであります。

二 古墳から神社への機能の移行

北九州を中心に「破鏡」が発見されています。この破鏡や銅鏡、一説には支配者が分配するものとする説から、破鏡については一枚の銅鏡を割って同族に分配していたとする説もあるようですが定説にまでは至っていないようには思われます。ただ古墳時代当時の日本に於いて銅等の金属は自国での生産はされず輸入に頼る他無いという点に於いて貴重であるということは確実であるということは論じるまでも無いところでしょう。

さて、現在一般的な火葬を行う場合は故人の好きだったもので「燃える物」と草履や六文銭の絵等が副葬品？として棺に納められたりしておりますが、弥生時代後期～古墳時代中期と古墳時代後期とではその副葬品の特徴にもその違いが見受けられます。現在のような、というより例えば海外のピラミッド等に見られるような埋葬者個人の所有と思われていた副葬品が出土する例は5世紀後期以降であり、それ以前は多くの場合、鏡・剣・玉・埴輪等、個人所有という意味合いとは別に捉えるべきものが埋葬されていたそうです。このことは古墳に関する入門書的な書籍にありましたが、私はこの違いに着目することにしました。逆にこのような初歩的な点から導き出される推

論に至れた点があったことに自分で少し驚きを感じました。

また完全とは言えませんが横穴式石室が出現するのも時期的に重なる点にも留意が必要と考えます。一般に横穴式石室は渡来人による影響という説が有力とされておりますが、私は全く別の意味を含んでいると考えるところであります。横穴式石室は何人もの被葬者を埋葬できるようにする事ができるようにした真の意味での「お墓」としての機能性向上を示す結果であり、後述しますが、祀りの場としての意味を失った証であろうものと推察されるのです。勿論堅穴でも 2 つの石室がある例は数多くあります。例えば金象嵌鉄剣で有名な埼玉稲荷山古墳もそうですし、卑弥呼の墓の候補ともなっている箸墓古墳も X 線調査では 2 つの石室があることがわかっています。私的な意見ですが、これらはあらかじめもう一人の埋葬者が予定されていたのではないかと考えるところでは、2 つの石室がある場合若し同時に埋葬されたのであれば、おそらく棺の配置は平行になっていたことでしょう。大分時期がずれてもう一名が埋葬される際、それまでの埋葬者の埋葬状態の損傷を避けるためにそこに整然さが伴わないものと思われまふ。いずれにしてもその古墳にはあらかじめ誰を埋葬するかは決まっていたとするのが当然でありその目的も初期古墳では前述のように祀るために用意された「施設」と呼んで良いものではないかと考えます。

ではどのような祀りが行われていたのか？これは正直なところ想像の域を出るものではありません。個人は精霊との合一化がされ神となり、他の神と同様に依代に降りてくるといふ説をとるならば、後円部の一番上に埋葬されているあの埋葬の位置は依代の位置として最も適当とも考えられます。勿論ここに死者の蘇り等の概念は存在しないでしょう。石室内の整然とされた副葬品は、死者の為というよりも、埋葬後の邑・クニの祀りのために必要であったマニュアルであった事と推察されます。そして祀りの形態は恐らく今の神社で行われている数々の儀式とりわけ収穫の際の貢物のような祀りのようなものが行われていたと思われまふ。古墳の大きさは権威の象徴であるとともに霊威の大きさへの願いのこもったものと推察するところでは、このような概念は神道でいう「死=穢れ」の概念とは大きく異なるものであることは承知するところであり、いかにしてその穢れの存在から神へ認識の転嫁を当時の人が行っていたのかは不明な点もあります。しかしながら邑・クニという集合形態がその機能を完成させた後にこのような自然神以外の霊威を必要とした事を想像するにはそれほど難しくないことと思われまふ。以下にその点について少し触れまふ。

なぜ初期古墳にそのような「おきまりの」祀り祀られるがための副葬品が埋葬されるのか？それはそれが祖神としてその、むら・くにを守る為の重要なモニュメントとしての要素があったと言えるのではないのでしょうか？近畿圏では紀元前 3 世紀頃より銅鐸の文化がありましたが、古墳時代を境に消滅しているとされてまふ。銅鐸は祭祀の道具とされてまふが、このことも無関係とは言えないかもしれまふ。

縄文末期から稲作が広まりとその定着をみたと言われてまふ。武光誠氏は、当

初霊威を感じる存在として巨岩・奇岩・山という自然物であったものが、その稲作の定着から、豊穰を導く川・池・沼または単純に食物などに変化を見せていたと説いています。その次に願うべきものはなんでしょうか？私はその環境を外敵から守る事と子孫繁栄ではないかと考えるのです。それが初期古墳の副葬品の剣と玉、また自然神との習合・合一を示す鏡であることはここで明白であります。

古墳はその首長の権威を示すものであるという見解に異論はありません。しかしながら果たしてその意味がそれだけであるという考えがあるとするれば、それには同意しかねるところです。初期～中期における古墳の副葬品に示されるのは埋葬者の意思よりもそのクニの意思が強く反映されている、言葉を換えれば願いが反映されているのように結論するところです。

ただここで一つ問題点があります。それは弥生時代後期～古墳時代中期の私が指摘する古墳の埋葬者が、単なる権力者であったのか？はたまた卑弥呼のように鬼道とされているような宗教的な政治支配が行われていたのか？という点です。前者であれば、その首長は死後、祖神として祀り上げられたことになり、後者であれば生前の延長線上として祀られたということになります。当時の本質的な政治形態が首長者本人による祭政一致によるものなのか？それとも祭政分離なのか・・・？この点については以下のように考えます。

- 地域性を無視できないということ
- 姫彦制が中心であるならば、男性が首長の場合祭政分離型の方が強い可能性高い
- 祀りあげる神のその目的

以上の点から考えて

- 自然神への信仰はクニの発達とともに機能化・儀式化した。

一方でそれを政治に用いてきたかどうかは、民間信仰と支配機構との習合がどれだけ地域により進んでいたかが不明と言わざるを得ない。

- 古墳時代になると大和朝廷との関連性が強くなりある程度画一的な埋葬形式が進んでいた事が想定される。

このような点からおそらく全ての初期古墳が祖神としての機能を持っていたわけでは無く、一つの形式的な埋葬をされていた可能性が否定出来ないだろうとは思われます。そして祭政一致の延長線上である可能性は低く、埋葬時祖神となるための儀式がなされていたのではないかと推測されます。というのも姫彦制が実際ならば首長は生前は政治としての支配的な位置にあるためです。

さて古墳の目的について触れたところで、本節の神社への一部機能の移行について触れます。

本題に入る前にそもそも埋葬後その墓はどのようにされていたのか？という論頭に対する一つの答えです。「神と死者の考古学」笹生衛氏では「続日本後記」841年に雨が降らず占ったところ神功皇后陵（五社神古墳）への貢物がきちんとされてい

なかったためであったとあります。つまり古墳に埋葬された後にも貢物がされていたという事実があります。理由は単に貢物が正しくされていなかっただけなのか、はたまた神功皇后が祀られている宇佐神宮が社伝によれば 725 年に創建されているためこれと関係があるのかは不明です。しかし後者であるならば、古墳での貢物は単に貢物を捧げていただけでなく、神として祀られ儀式的なものが行われていた事は間違いのないところでしょう。それが神社創建とともにその扱いに変化が表れ、儀式等機能の移行があったという結論が導き出されます。これが神社の起源の一つではないかと推察されるのです。

一般には神社の起源としては岩・山などの自然崇拝物に対する霊威からそれを神籬とし、次第に神社となっていると説明されておりますし実際に大神神社のような例もあるものの、実際には人工物（鏡等）をご神体としている神社が多いのはこのためだろうと考えるのです。様々な習合や廃退のある中で実際は祖神となり自然物を崇拝対象とする神社を凌駕していったと現状が語っているように思われます。その例として大宮にある氷川神社についてふれたいと思います。氷川神社の主祭神は大国主命です。しかし以前は見沼という地域一体の水源を崇拝する自然崇拝であったとされています（「神社の古代史」新人物文庫）。また鹿島神宮も、もともとは水上交通にまつわる神が祀られていたそうです（同著）。他にも全国的に観れば同様のケースは少なくない事でしょう。私見では前述の自然神の代表格とも言える大神神社とて解釈によれば微妙な受け取れができます。大神神社は三輪山をご神体とし、古事記では蛇として神と人との婚姻が物語られています。ここから推測されるのは、人格神である自然神の姿です。一方日本書紀では崇神天皇に大物主神は大国主命の荒魂であるということであります。ここに矛盾が生じます。山は単なる依代と仮定したとしても大国主の生まれるずっと前より存在していることになり、和魂の大国主命のはるか以前に荒魂である大物主が存在したことになります。この矛盾を解こうとするともう別の論となってしてしまうことでしょう。ただ一つはあまり和魂・荒魂と区別しないで、単に崇神天皇の皇子に厄災を及ぼしたことによりそのような区別がされたとされ問題は時間的矛盾を受け入れながらも人神が自然神を凌駕している様子を感じさせるエピソードと私には映ります。

尚、一部の書籍に人の死後神格となった神を人格神と表記されているものが散見されますが、辞典等にはそのような内容を含むものは見当たらなかったため、明確に人の死後（天皇を含む）神格化したであろう神は人神、それ以外の人格を有する神を人格神、と表記しております。

ここで本章のまとめをします。

- 縄文時代末期頃稲作が普及しはじめた
- それまで自然崇拝が中心であった信仰に変化が起こり始め最重要なのは稲作に重要な太陽となった。

- 弥生時代後期になるとクニ・邑を守るという新しい神の概念が生まれていった。
- その神は生前クニを守っていた首長、つまり人そのものであった。
- 人は首長を神として祀る為古墳を作りはじめ、次第に大型化の傾向を見せた。
- 首長は死後祖神（氏神）とされた。
- 古墳にて祖神としての祀りが行われていた
- 祖神のような人神は次第に人の需要（願い）の高さから、重要性が自然神を凌駕していった。
- 神社が創建されはじめ、それとともに古墳での祀りという機能が喪失していった。
- 次第に古墳は小型化、形骸化が見られ私物を多く埋葬するなど単なる埋葬施設の性格を強くしていった。
- 古墳という形式に意味をもたなくなり最終的に 646 年薄葬令により古墳の終焉を迎えた。

三 記紀に見られる人神と自然神

これまで古墳の意義を中心に時代の流れによる変化について論じました。さてそれでは記紀などについて、これまでの論を踏まえてどのような見方を加えるべきか？それについて論じたいと思います。記紀のどこまでが神話でどこからが史実か？解けることの無い課題なのかもしれません。実際これまで触れた著作でもはっきりとこれに言明されたものは見受けられません。中国等の史書と照らし合わせてある程度の一致を視たところからなのなら宋書での雄略天皇なのでしょうか？でも記紀には宋に使者を送ったと言う記事はありませんし、一言主の下りはいかにも神話的です。私は前章で論じた内容にて多少の説明に至れるのでは無いかと考えるところです。

1 日本の神（最高神誕生まで）

神はいくつか分類の仕方があるかと思います。例えば「天神地祇」。通常はこれで良いのでしょうか。しかし本論の場合、この分類ですと相互に入練りがありすぎ論が進まないため本論では次のように区別します。

- A 形而上的の神
- B 人格神
- C 自然神
- D 人神
- E 民間信仰神

こんな感じで区別してみました。問題なのはこのように分けたとて、複雑に絡む部分があり、また複合的な要素を含む全ての神について厳密な区別は出来ま

せん。また本論にあたり他著・他論による引用も勿論ありますが、逆に論を進めるため仔細を省略する点多くあります事あらかじめお断りします。また上記うち、荒神や道祖神に代表されるEの民間信仰神も本論からは対象外とします。本論では自然神と人格神・人神との係りについて記します。

記紀には記載されていないものの風土記には記載のある神、どちらにも記載が無い神これら多くの神は人神であったであろうと思われます。どれくらいの神がいたのか？文字の無いころの神、総数は及びもつきません。しかし本論に沿えば相当数の人神が崇められ、大和朝廷の支配の伸張とともに忘れられたことでしょう。民族毎に人神が存在した。この論は古墳群の多さがそれを物語っているのではないのでしょうか？そのような事を加味しつつ記紀の神に焦点を移します。

A 形而上的の神についてですが、これは古事記に記されている別天津神（高木神を除く）を指し示します。高木の神は全ての神の中で極めて特殊であり、エネルギー的存在である形而上的なものと、天岩戸伝説などに見られる人格神的性質、さらに太陽神的性質（伊勢神宮の謎を解く「ちくま新書」）もあるとなると自然神の性質も持つかなり異質であり、最高神とすら言えなくも無いかみであると言えます。

またトコタチの神も形而上的の神と言えるでしょう。記紀の中で人格を示しているとみられる箇所はありません。私見ですが、天御中主が宇宙的な位置的なものをしめしているならトコタチの神は日本の存在というか感覚を示しているといえるかもしれません。

そして宇比地邇神～阿夜訶志古泥神までは一応男女の別があるものの次の最後の神世七代の神、勿論伊弉諾伊邪那美までのつなぎ的なイメージが拭えませぬ。その意味では創成という概念の流れの中の神とも捉える事が出来、形而上とも言えなくはありません。

そしていよいよ恵比須様の後、日本・大八嶋の誕生となるわけですが、大まかに捉えれば自然神と言えるのかもしれませんが。とはいっても大八嶋を神という意識を以て古代史を探究するものにとってはあまり焦点を置ける場所ではないかもしれません。しかしながらムスヒの神より創成の場の神とそのエネルギーの神、それに続く創成神の流れの中で、創成の結果として大八嶋は通るべき、そしてまずはそれ以上の自発的創成を促せる場としての大八嶋はまず必要な神であったと言えるでしょう。

ここまでの神の系譜はまさに哲学的かつ論理的であると言え、またそれを神の体系化によって示すという形をとることにより、存在に係る説明が為されていると言えます。このような論理実存の証明に一体いつ日本人はそれに至ったのか？それは想像の域を出ませんが、おそらく自

然神を中心とした信仰から人神の信仰がそれを凌駕してゆく段階において、存在の源流に係る思索（祖先の行きつく先がどこか？）が自然の流れの中で人々の中で生まれ、その結果であろうかと考えられます。つまり記紀の中では自然神は創成の形が整ったのち伊弉諾と伊邪那美が生んでおりますが、実際の思索の上ではその順番は逆であったと言えるのではないかと考えられるのです。

さて多少順序が前後しますが、次に三貴神について考察します。この三柱は記紀によって生まれ方、自然神との前後による生まれる順番、さらにアマテラスの最高神の決まり方が異なっていることは周知のとおりです。ただ先代旧事本記・古語拾遺が、伊弉諾・伊邪那美が日本書紀本書同様、C 自然神の前に三貴神を生んでいるからと言って、古事記神話の内容が損なわれるというものではないでしょう。とは申せ、一方で古代史として考えるとこのところが一致しないということは致命的ともいえ、当然歴史という概念からは除外されるところとなるのは必然のようにも思われます。しかし、アマテラスを人神として捉えると、つまり単なる氏神としてではなく、人神かつ実在した人物としての祖先神として捉えると、古代史的一幕としての見方に大きな焦点を加える事が可能となることと確信するところであります。

さてそのことも含め記紀には三貴神での様々な相違がみられます。これについて一部検証してみます。

- 1 日本書紀本書では大八嶋の次に誕生し、古事記では伊弉諾の最後に誕生している
- 2 日本書紀異伝の一つには鏡よりアマテラスと月読が生まれている
- 3 日本書紀では伊弉諾と伊邪那美との結合により誕生、古事記では伊弉諾の禊の時に顔から誕生
- 4 アマテラスを最高神としたのは日本書紀本記では生まれる前、古事記では生まれた後である。

以上の事を挙げてみました。はっきりした論書の名を失念してしまいましたが、津田左右吉氏は「なぜ最高神に親がいるのか？」という問いをみせておりました。確かにゴッドもゼウスもエジプトのラーも親はおりません。当然最高神に親がいるなら、それこそ最高神であるべきです。しかし日本の神の系譜においてはそのようにはなっておりませんし、不自然さを覚えるところですが。なぜ最高神に親がいるのか？これこそがアマテラスが人神である所以と言えるのではないのでしょうか？どんな人にも親はいます。

しかしアマテラスが人神ではあってもその親は単に人でしかなく、普通の人から生まれながらの最高神が生まれるという構図は、不自然さがあります。この不自然さを解消するために、それまでの形而学的に系統化されてきた神の系譜に繋がれた、これがさまざまな不自然な解釈を加えざるを得なかった最高神誕生の解答と言えましょう。韓国の建国と言われる三国史記に見られる天光受胎も同様の構想と言えるかも知れません。初代の王にも実際のところ父親も母親もいたはずですが。しかしそこを換え、卵から生まれるという不自然な出生形態によりそこが神話化され、それにより初代が誕生し初代が神格化される…。

古代の人が特定の首長を古墳に祀り、氏神として崇める。後にある氏神はそのクニの衰退・繁栄・習合に伴い語り継がれる中で、消える神もあれば、神の系譜の中で最高神となるものもあつた。決して神話は神話の中だけの世界では無く実際の古代の姿を銅鏡で映し出したが如く反映されたものかもしれません。

先に挙げた記紀における三貴神の様々な異説は、その中の人神アマテラスが最高神となるための説話であるがゆえ、つまり逆から話が創られたがゆえの産物、そのように結論づけるところです。

2 最高神とその兄弟の神々

さて、三貴神の他の二柱、素戔嗚と月読について簡単に触れておきます。こちらは論理的に考えて人神ではありえないということになります。最高神である人神が祖先神である以上それと兄弟神である二柱が人神であるはずがありません。まず素戔嗚については本来農耕神であつたと「創られたスサノオ神話」で山口博氏が説かれています。そこでは一般にはその性格ゆえに雷神説が有力であるとされているところの批判的姿勢です。また「古事記」神話の謎を解く」の中で西條勉氏はアマテラスとスサノオは赤の他人であつたと断じられている。少なくとも本来姉弟でない神を姉弟神としたのは、神話での創作であつたと考える方が恐らく無難であろう。

一方月読については日本書紀で誕生譚以外では保食神とのやりとりがあるのみで、人格神とすら言いづらい感があります。以前伊勢神宮を参拝した折、月読宮にも参拝したのですが、その際神主さんから「月読様は時を司るとも言われています」というお話を伺ったことがあります。なるほど長い間太陰太陽暦でしたからうなずける話です。しかしではいつから？となると不明としかいいようがありません。仮に当時漠然と概念的に「時」を把握されていたならば、時を司っていたとする月読はむしろ形而的とも言えるのではないかと考えます。

3 最高神としての役割

先に述べた通り、記紀にあるとおりアマテラスが昼、月読が夜、素戔嗚が海原を統治するとある以上の意味合いが、そこにはあり、アマテラスは人神として神としての最高神でもあるための状況を神話において説明づけていると結論するところであります。実際アマテラスが最高神として疑問符のつくエピソードが記紀には多く記されています。

- 最高神が最初の神ではない
- 最高神が親の意向で決められている
- 素戔嗚との誓約で負ける、素戔嗚の意図が見抜けていない、誓約のルールが詳細に決められないまま受け入れている
- 素戔嗚の横暴に対し、その罰則を他の神が決めている
- 大国主の国譲りの際、どの神を派遣するのか？そこにアマテラスの意見は無い
- 天孫降臨の際、天忍穂耳に断られる
- 神武東征の際、熊野村でのエピソードで建御雷に断られる

とりわけ3つ目以降、実際の間人社会の厳密な上下関係が構築されている中で、果たしてこのような現象が起こり得るでしょうか？また仮にあったとて後に残すものでしょうか？素戔嗚の挨拶をアマテラスが疑いも無く天上界に招き入れていれば、オシホミミは生まれず、天皇家は存在しなかったこととなります。神話と言ってしまうとそれまでかもしれませんが、やはりそれなりの理由が存在してしかるべきであると考えます。

アマテラスの子は性交によって生まれていないことを旧約聖書のアダムとダブらせる見方をする人もいるようです。しかしそれよりもっと容易で分かりやすい見方があるのです。それは「死者は子供を産まない」ということです。繰り返しますが、アマテラスが神になったのは死後、これが本論を通じて述べていることです。死後その子孫等の祀りにより人神になったアマテラスは死後、最高神として子孫を残すということになります。そのために素戔嗚という自然神に人格を持たせて姉弟神とした。そこから天孫を初めとした天皇の系譜が出来上がった。これが記紀をとおした一連のながれなのではないのでしょうか。人→人神→最高神と、人々の中で変遷を遂げる間に仕上がった物語は、とりわけ日本書紀では生まれる前から最高神であるというギャップを持つ中、最高神らしからぬエピソードが残っていった。私はそのように結論いたします。

4 アマテラス以降の系譜の実在性について

以上本論に於いて、私は古墳のありかたから皇祖アマテラスは人神であったと論じました。これは崇神天皇以降を実在とする説、また応神天皇以降を実在とする説だけではなく、神武天皇実在説というむしろ少数派？からしても荒唐無稽の論となってしまいます。「日本古代史の論争 51」（新人物往来社）で前田晴人氏は神武天皇実在について「学問的に無益な妄想」と断じています。

私は神武天皇こそ実在したとは思っておりますが、記紀に記されている系譜全てが実在したとは思えぬところでもあります。これについてはいずれかの機会に投稿したく思います。本論に於いては、実在・非実在についての可能性について簡略に見方のみ記してみたいと思います。

現在では本人確認法からマイナンバー制の導入など、個人名は個人を表す最も重要な名前となっております。しかしそれを基準に古代の名前・神名を捉えようとするとかかなり近視眼的になってしまうのではないのでしょうか？

名前とは別に過去には屋号というものが長く使われておりました。そこには個人より優先される「家」という観念があったのではないのでしょうか？日本には長らく観念的にそこを優先して考えるべきかと思えます。決して実在・非実在について論じることが無意味という事ではありません。まずは「家」という流れの中で皇祖神アマテラスという人神から続く系譜を捉えるべきかと考えます。これによりおそらく文字の存在なかったであろう時代に構築された形而学的神の世界観よりつづく意味合いを掴めるのではないかと思えるのです。疑うべき優先順位は、実在・非実在の前に文字の無かったころより最大にして律令のころの 400 年以上の間、名前の言葉の意味合いだけで正しく伝承されてきてきたのかどうか？であるべきでしょうか？そのように考えれば途中はともかく最初の実在については疑うところが無いということになるのではないのでしょうか？

四 おわりに

古代史とは一切関係ありませんが、銀河系はダークマターという観測が出来ない物質に包まれているといわれています。その存在理由の契機は、本来太陽系の惑星のように、遠心力と重力の関係から、中心に近い星ほど公転速度が速くなり、中心から離れる程公転速度が遅くなるべきところ、銀河系にはその理屈が当てはまらず同じように渦巻状に公転しているところからあるはずとされている物質です。私がおの例で問題としたいのは観測的には何十年もの間その矛盾は把握できていたはずなのにまともな問題として取り上げられていなかったということです。一古代史好きの者が言える事ではないかもしれませんが、古代史でもそれに似通った点もあるのではないかと思えるのです。既に論じたように多くの神社では鏡がご神体とされ、剣や玉がある。前期～中期の古墳の副葬品にもその 3 種が

含まれている。勿論いわゆる3種の神器も同様です。でもそれが「何故か？」という点に触れている緒論には目に触れることはありませんでした。古代史では鏡や今回触れませんでした。銅鐸銅戈などは「祭祀の道具」で終わりです。どのような祭祀であったのか？またどのようにして衰退したのか？明確にはされておりません。威信材という言葉も使われます。現在の舶来の超高級ブランド品のような感覚なのでしょうか？いえそんなはずはありません。でもそのような感覚で書かれている本ものもあります。ではその威信材は当時だれもが靈威のようなものを感じ得るものだったのでしょうか？それも疑問です。威信材といってもその意味合いは論理的に曖昧であり、祭祀の道具というのなんとなくそれで終わらせるための表現のように受け取れてしまうのは私だけでしょうか？

私は本論にあたり、まずは鏡における共通点への疑問に触れました。また魏志倭人伝で焦点の一つとされる「卑弥呼は誰か？」という点において触れたつもりです。まだ根拠に乏しい状況ゆえ、断言は避けましたが個人的には「卑弥呼＝アマテラス」との思いで論じました。

神功皇后、倭姫、倭迹迹日百襲姫、そしてアマテラス様々な記紀の登場人物またその他に比定されているところでもあります。しかしながら卑弥呼が倭人条において実在するとされている以上、比定するならば、まず比定者の実在性に迫る必要性があるはずではないでしょうか？ところが記紀におけるその比定者の周辺は所謂神と称され実在性に極めて乏しい存在であるわけです。その論理矛盾に対し少しでも迫ったつもりではあります。ご一読いただけた上、ご理解いただけた点ございましたら大変嬉しいところでございます。